

中世城館の構造とその変遷

— 千葉県内の発掘成果を通して —

柴 田 龍 司

目 次

はじめに	387
1. 中世前期～中期の城館跡	387
2. 中世中期～後期の城館跡	393
3. 中世後期の城館跡	399
4. 中世前期～中期の城館の特色	407
5. 中世中期～後期の城館の特色	410
6. 中世後期の城館の特色	412
7. 立地、形態、内部構造の変遷	413
おわりに	414

はじめに

千葉県内の中世城館跡の発掘調査は、既に200例近くになるものと思われる。だが、中世城館跡は単独の遺跡としては大規模なため、200例近くの発掘調査の大部分は城館跡の極一部を対象にしたもので、中世歴史資料の蓄積としては決して十分な状況とはいえなかった。

しかし、一つの城館跡の規模を上まわる開発事業の盛行と、全国的な中世城館跡の考古学研究の進展によって、従来ならば堀や土塁に対してトレンチを入れ、それらの幅・深さ・高さを知れば良しとしていた線的な発掘から、城館跡内部の使われ方をも調査対象とする面的な発掘へと移行してきたことから、城館跡の内部にどのような遺構があり、またどのような遺物が残されているかが明らかにされ、城館がどのように築かれ、使われたのかを考えることができる発掘成果が徐々にではあるが増加してきた。

以下、上記のような発掘成果の蓄積を含ませて、本論では城館跡の内部が全面的いしはそれに近い範囲で発掘された千葉県内の事例に基づいて、城館内部の利用方法を通して、時期的および機能的な違いによる差異あるいは共通点について明らかにしたいと思っている。また、築城以前の土地利用についても触れてみたい。

1. 中世前期～中期の城館跡

本節では、13～14世紀に成立し、遅くとも15世紀前半代には廃絶した城館跡を対象とする。

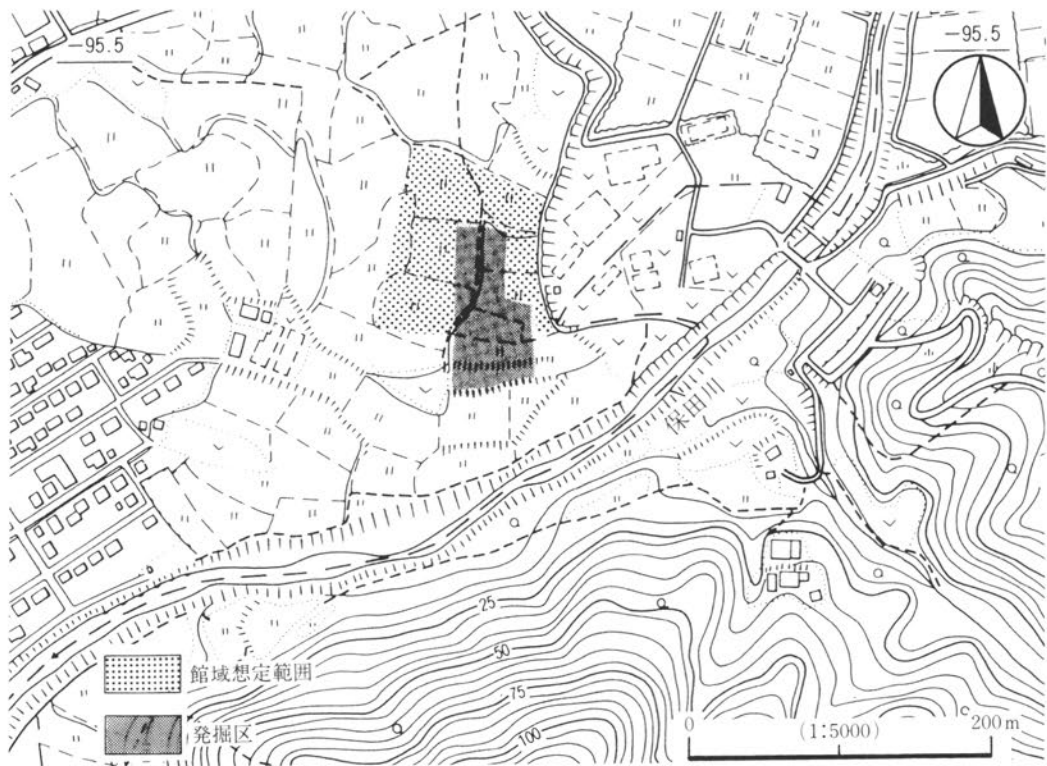
(1) 下ノ坊遺跡B地点⁽¹⁾ (第1・2図)

所在地・立地 安房郡鋸南町保田に所在し、海岸線（東京湾）から東方に約1km内陸の、保田川に面した標高11mの段丘縁辺に立地する。

調査の経緯と範囲 国道建設に伴い（財）千葉県文化財センターによって発掘調査が実施された。発掘によって初めて中世館跡であることが明らかになった事例で、方一町と推定される方形館跡の中央～東南部分、全体の1/3、約3,200㎡の調査面積であった。

城館の時期 主体となる存続時期は13世紀後半～14世紀後半。

城館の性格 在地の国人領主層である安西氏か笹生氏の居館⁽¹⁾、あるいは鎌倉時代中期以降の二階堂氏や北条氏の在地における支配拠点⁽²⁾、の2説が考えられている。前者の場合は、安西・笹生両氏の本拠と考えられる場所が遺跡からはかなり離れていることから、可能性としては低いと思われる。後者の場合は、後述するように井戸跡を除いて館・建物の規模や出土遺物の組成からみて、積極的に肯定する資料は認められない。全く史料に登場しない国人領主層の居館であった可能性も含めて、何れにしても当時において平均的な規模の館であったと考えられる。



第1図 下ノ坊遺跡B地点位置図

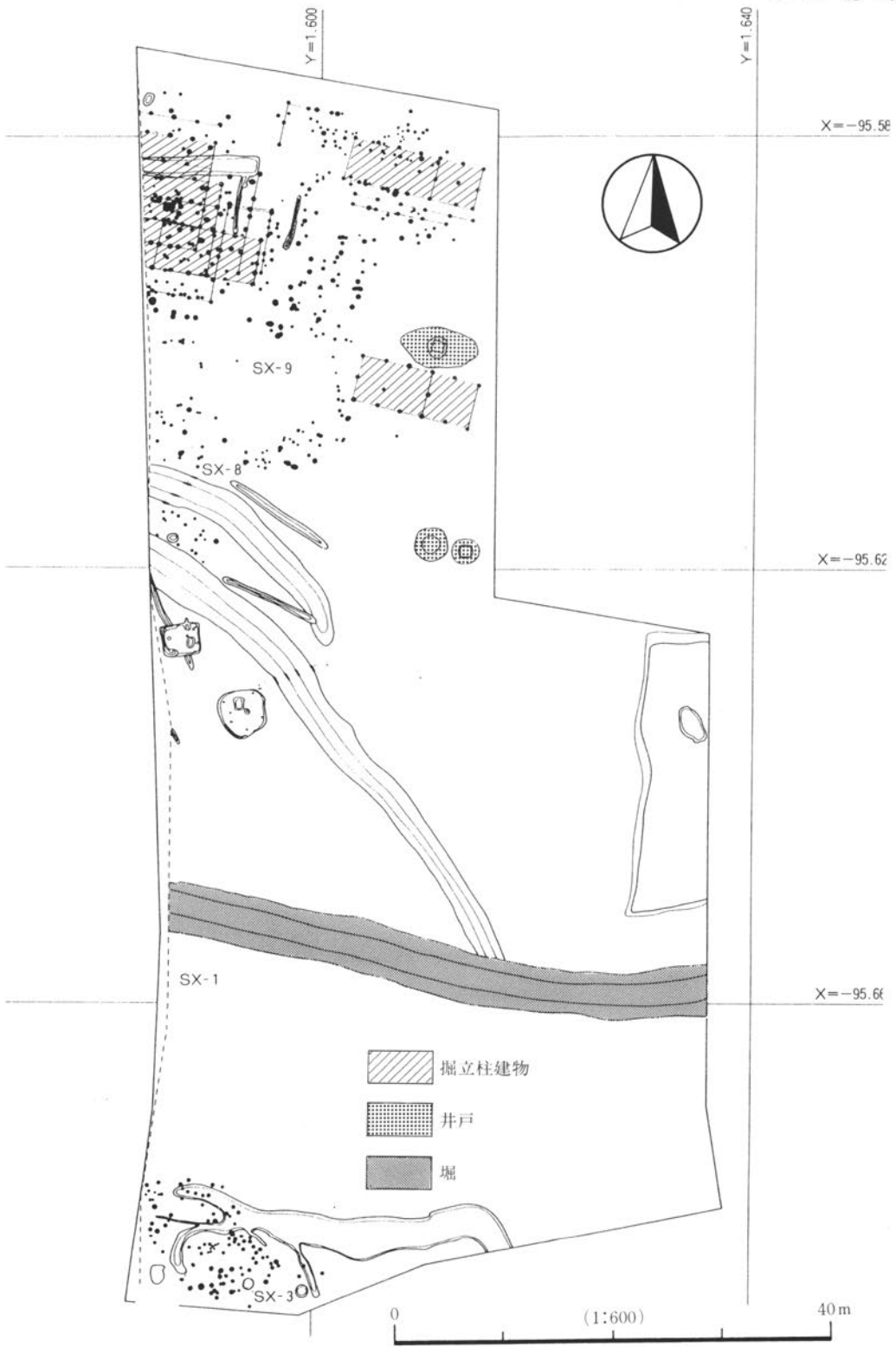
検出遺構 館跡の南辺を画する堀跡が、上幅4.5m、深さ1.4mの規模で、断面が緩いU字形を呈して50m程検出された。また、館跡の中央部分で掘立柱建物5棟と柵列および多数の柱穴群、井戸3基が検出されている。土坑および墓坑は検出されていない。南辺の堀と中央部の遺構群との間は、古代以前の遺構が検出されただけで、中世段階は遺構空白地帯であった。

復原できた掘立柱建物5棟は、二面廂付で3間×3間以上の建物1棟、一面廂付で3間×3間以上の建物1棟、廂を伴わない建物（2間×4間、2間×5間、2間×6間）3棟、に分類される。

3基の井戸は、①方形隅柱井戸枠、②方形横棧支柱型井戸枠、③素掘り、と各々構造が異なる。中世の木組み井戸が県内で検出された例は、調査事例が少ないこともあるが、いまのところ本遺跡と後述する岩川遺跡の2例だけである。

出土遺物 陶磁器では、常滑窯の甕・片口鉢が主体を占め（点数は不明）、瀬戸および渥美窯製品が若干出土している。また、中国製品は白磁4点、青磁29点で、青磁は何れも龍泉窯系の製品である。カワラケは51点出土している。

時期的には、常滑・渥美窯製品が12世紀末から若干15世紀代と思われるものまで含むが、多



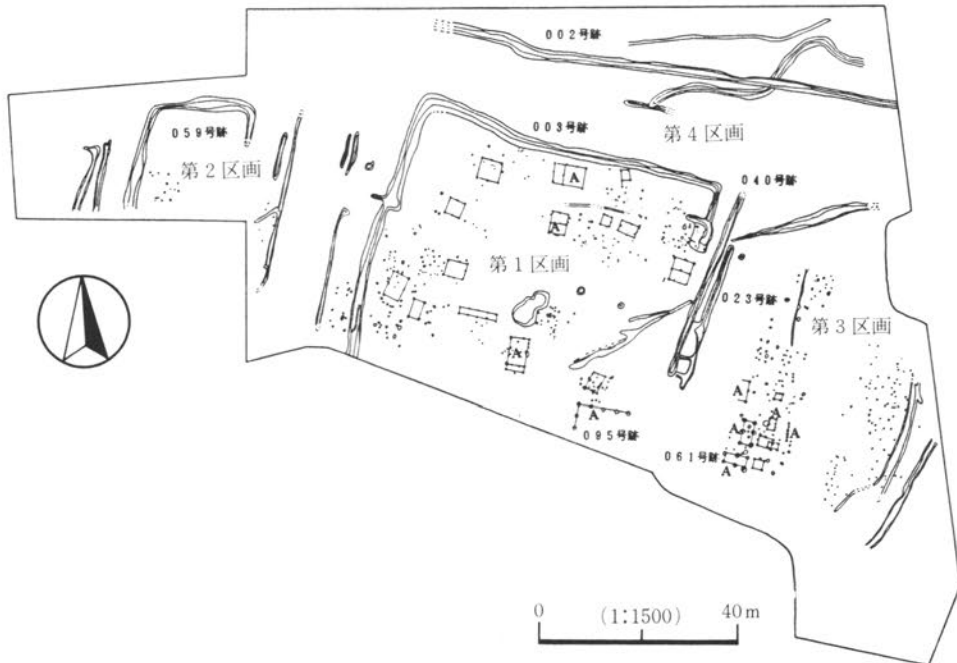
第2図 下ノ坊遺跡B地点全測図(古代含む)

くは13世紀後半から14世紀後半までのものである。中国製品も同様な時期である。

小括 館の中心域は、廂付建物が検出された地区が建物の規模からみても間違いのないであろう。中心域の周縁には主屋より小規模な建物と井戸が配され、さらにその外側は堀まで空白地区であった。非常に求心性の強い内部構造であるといえる。また、少なくとも発掘区の範囲内では墓坑と考えられるような遺構は検出されていない。

(2) 岩川遺跡^③ (第3・4図)

所在地・立地 房総半島のほぼ中央部に位置する長生郡長南町岩川に所在する。東流して太平洋に注ぐ一宮川と併走する支流本台川に挟まれた(約200mの幅) 標高15m程の沖積地微高地上

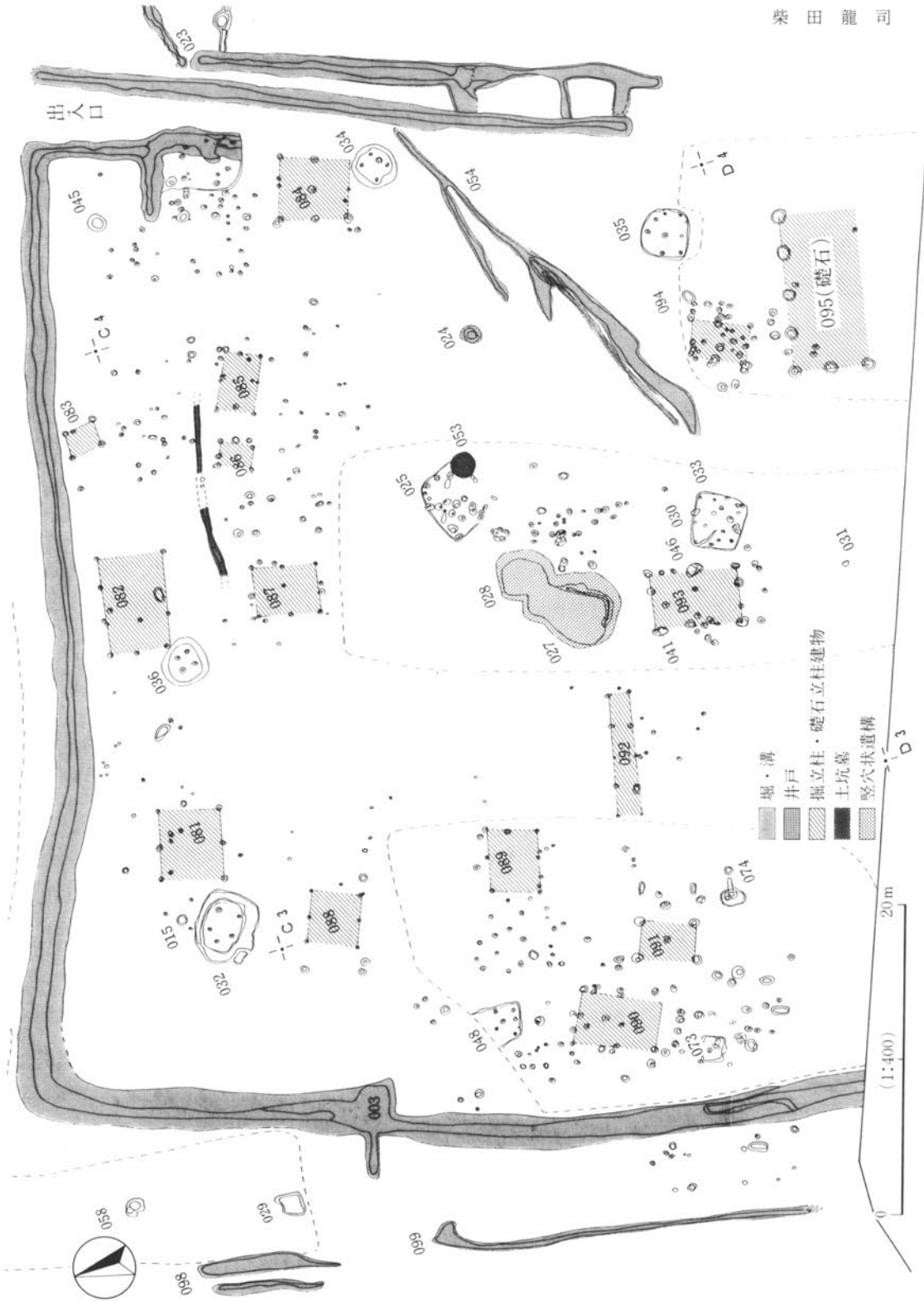


第3図 岩川遺跡全測図(中世のみ)

に立地する。遺跡は従来は島島として利用されていた微高地上全面に展開していたと思われるが、部分的に水田化に伴う削平が行われたため、ところによって遺構の遺存状況が悪いため、一概に遺構空白域を当初からの状況とはいえない点を留意する必要がある。

調査の経緯と範囲 ほ場整備事業に伴い(財)茂原市文化財センター(現長生郡市文化財センター)によって発掘調査が実施された。発掘によって初めて中世館跡であることが明らかになった事例で、中心となる館跡のほぼ全面と周辺部の一部について実施した。発掘面積は約14,000㎡。

城館の時期 12世紀末～15世紀前葉までの陶磁器が出土しているが、主体となる時期は13世紀



第4図 岩川遺跡第1区画全測図

～14世紀後半と捉えられる。

城館の性格 複数の区画から構成される館群であり、東西域は少なくとも170m程の規模を有し、さらに、いまのところ県内では唯一の検出例である礎石立建物跡（095号址）の存在からみて、在地領主層あるいは鎌倉幕府・鎌倉府関係者かは不明ではあるが、階層的にはかなり高いクラスの館であったと思われる。

検出遺構 溝によって画された区画が4か所検出された。第1区画は東・西辺51m、北辺60m、面積約3000m²で、中心となる区画である。区画溝はかなり削平を受けていたものの、上幅1.5～3.0m、深さ0.5～1.0mの逆台形を呈する。区画内からは15棟の建物跡（礎石立1、掘立14）、井戸1基（024・方形隅柱型井戸枠）、火葬墓3基（030、031、053）、竪穴状遺構2基（027、028）、土坑17基、等が検出されている。

第2区画は東西20m、南北20m以上、面積400m²以上の規模を有する。区画内からは遺存状況が悪かったこともあり、柱穴が20個検出されたのみである。

第3区画は南北辺は溝で区画されていなかったようで、東西43m、南北40m以上、面積1,600m²以上の規模を有する。建物跡は畑地部分からのみ8棟検出され、何れも掘立柱建物である。ただ、066号址のみ掘り方から根石が検出されているので、本建物が第3区画の中核的な施設であったものと思われる。

第4区画は第1区画北辺を画する溝と併走する溝とで画され、南北13～19mの規模となる。畑地部分を含めて溝を除いて中世遺構は全く検出されていない。居住空間としては捉えられないようである。

出土遺物 陶磁器では、常滑窯の甕・片口鉢が圧倒的に多く（数百点）、渥美窯製品も何点かみられる。瀬戸窯製品は、卸皿・鉢・天目碗・灰釉瓶子が若干ある。中国製品は、青磁68点、白磁8点と、白磁に比べ青磁の比率が高い。また、青磁には若干ではあるが同安窯系の製品や水注のような優品も含まれる。

時期的には、12世紀末～15世紀前葉までの製品が出土しているが、出土量からみると遺跡の成立は13世紀前半で、廃絶は15世紀前葉と思われる。下ノ坊遺跡と比べると、前後が若干長くなる。

小括 少なくとも、第1区画が中心となる館で、東西に各々規模の小さい館を配する構造であったとみて間違いはないであろう。内部の構造がある程度捉えられるのは第1区画と第3区画であるため、この二つの区画についてまとめてみる。

第1区画は、調査前の現状が畑地部分（第4図の点線で囲われた範囲）と削平を受けた水田部分からなるが、水田部分は遺存状況が不良のため本来の建物配置を厳密には表わしていないと考えられる。しかし、検出された建物配置をみる限り、北東コーナー部の入口から中央部は

広場的な性格の空間である。逆に建物や柱穴群は館の縁辺に沿ってコの字状に配置されている。主屋と考えられる礎石立建物は館の南東部にある。下ノ坊遺跡とは全く逆の分散性の強い建物配置である。また、本区画内からは火葬墓が3基検出されているが、館の存続時期に伴うかどうかは不明である。

第3区画も、主に遺構は畑地部分から検出されているため全体の内部構造は不明であるが、第1区画よりは全体に建物が小規模な傾向があるものの、中央部分にも建物が群在していたようである。また、本区画内からは井戸が検出されておらず、しかも小規模な建物が多いことなどから、第1区画に従属する区画であったとしてよいであろう。

第2区画も、区画の規模が小さく、大形建物の存在が考えられず、また井戸が検出されていないことから、第3区画と同様に第1区画に従属する区画であったものと考えられる。

2. 中世中期～後期の城館跡

本節では、14世紀に成立し、15世紀後葉には廃絶し、16世紀代には機能しなかった城館跡を対象とする。

(1) 埴谷周路遺跡⁽⁴⁾ (第5図)

所在地・立地 山武郡山武町埴谷に所在し、九十九里平野を抜け太平洋に注ぐ木戸川とその支流で併走する境川に挟まれた標高40m程の台地分水嶺近くに立地する。このあたりの台地は小支谷が無数に開析し舌状台地を多く形成しているが、本遺跡は中世城館跡の多くが舌状台地先端部に占地するのと異なり、小支谷の最奥部台地上に占地している。

調査の経緯と範囲 町営の野球グラウンド建設に伴い、山武考古学研究所によって発掘調査が実施された。現状で土塁と堀が巡る館跡であることが判明しており、館内部の2/3程約1,600m²の面的な調査と、土塁と堀に対するトレンチ調査が併用された。

城館の時期 主体となる時期は14世紀後半～15世紀後半。ただ、現状で残されていた土塁や堀が構築されたのは、15世紀に入ってからと考えられる。

城館の性格 館跡に関する史料はもとより、記録・伝承さえも残されておらず、歴史的には全く不明である。しかし、館跡は小規模であることと、小支谷の最奥部に立地していることを考慮すると、在地小領主層の館であったと思われる。

検出遺構 土塁の内法で、東西35～40m、南北50～60mを測るが、その内2/3程を発掘したところ、中央部分で東西方向の溝によって郭内が二分（Ⅰ・Ⅱ）されることが明らかとなった。北側の虎口が台地基部に向かっていることと、北半部の土塁が大規模なことから、Ⅰ郭が主郭である。



第5図 埴谷周路遺跡全測図

遺構の検出面は武蔵野ローム面とのことで、検出された遺構は大規模な削平を施された後に構築されていた。全面調査が実施されたⅠ郭では、北東隅が周囲より1m程低く溝に続く落ち込みがあり、逆に三ヶ月状に高くなった部分に掘立柱建物や土坑が多数検出されている。

掘立柱建物は計13棟復原されたが、重複状況から一時期には3群各1～2棟で構成されていた。土坑はⅡ郭も含めて計27基検出されたが、内2基から板碑片が出土している。土坑内からは板碑の他には遺物は出土していないため性格は不明であるが、土坑の形態からみて何基かは土坑墓であった可能性が高い。

地下式土坑は、Ⅰ郭南辺虎口脇で1基、Ⅰ・Ⅱ郭を画する溝の下で1基、Ⅱ郭南東部で2基、計4基検出された。内3基は堅坑部に粘土が充填され重複する遺構より何れも先行する。また残りの1基も土塁が後に築かれていた。しかし、地下式土坑そのものは削平を受けてはいなかった。

井戸は検出されていないが、溝と接続する深さ0.5～0.7mの大型土坑が検出されているので、あるいは水留施設であった可能性もある。

出土遺物 陶磁器および土器は計268点出土している。その内、常滑窯製品（甕・片口鉢）だけで231点出土している。中国製品は白磁、青磁とも各1点、カワラケは7点のみである。その他の遺物としては板碑片が7点出土している。

時期的には12世紀に上るものが若干含まれるが、主体となるのは14世紀後半から15世紀後半までで、16世紀に入る遺物はないようである。

小括 全面調査されたⅠ郭では、計13棟の掘立柱建物が検出されているが、一時期には3群各1棟ずつで構成されていたようである。主屋は南側虎口に近い群に大型（33～38㎡）の建物が常に存在することから、この群にあったことは確実である。居住域の周囲は溝が巡り、コーナー部は一段掘り窪めている。おそらく居住域の排水処理と貯水機能を兼ね備えたものであろう。また、居住域の端には土坑が多く検出されているが、土坑の形態や板碑片の出土から墓坑であった可能性がある。

地下式土坑は計4基検出されているが、特色として何れも人為的に埋め戻され、最終期の遺構よりは古いことがあげられる。しかし、地下式土坑の廃絶と最終期の遺構の構築時期には断絶がなく、一連の行為であったことは明白である。

館内は全面にわたって大規模な削平を受けているが、先行する遺構である地下式土坑も特に削平を受けていないことから、地下式土坑も大規模な削平後に掘り込まれたこととなる。しかし、地下式土坑の1基に土塁が被さっていることから、地下式土坑が構築された段階には大規模な削平は既に施されていたが、土塁や堀は築かれていなかった可能性が高い。

本遺跡では、15世紀に入ってからであろうが、ある時期一気に城郭化した状況が捉えられる。

(2) 池ノ尻館跡⁽⁵⁾ (第6・7図)

所在地・立地 四街道市栗山に所在し、印旛沼に注ぐ鹿島川に開析した支谷最奥部の標高29mの台地平坦面に立地する。

調査の経緯と範囲 民間の住宅団地建設に伴い、奥田直栄氏を団長に学習院大学史学会が中心となって、1973～74年にかけて発掘調査が実施された。土塁と堀を巡らし、堀の外側で約50m四方の方形館跡の70%程(館内はほぼ全面)を発掘した。

城館の時期 14世紀後半～15世紀後半が主体。

城館の性格 館内がわずか30m×20mしかなく、また支谷最奥部に立地することからも、在地領主層でも末端に位置付けられる階層の居館と考えられる。

検出遺構 郭内の遺構検出面は郭外よりも2m程低く、館造成時かあるいはそれ以前に大規模な削平を受けていた。建物は何れも掘立柱建物であるが、土橋から六脚門を通して正面に位置するところで重複する2棟、北東張り出し部分で2～3棟検出された。前者が規模、構造の点からみて主屋であろう。

井戸は郭内で4基、郭外で3基検出されている。また郭内の主屋と門との間では径8～10m、深さ0.4～0.5mの窪みが2ヵ所認められるが、報告書では郭内の排水処理施設としている。

地下式土坑は郭内で4基、郭外で8基、計12基検出されている。郭内で検出された地下式土坑は、1基が郭内の他は、土塁の裾部や北東張り出し部との段差裾部に掘り込まれている。建物・井戸・土塁との新旧は不明であるが、裾部に掘られていることと、他の遺構と切り合わないことから同時期かあるいは地下式土坑が若干先行するものと思われる。郭外で検出された8基は堀内・土塁下で認められたが、地下式土坑同士の切り合いと、井戸状遺構より古いものと新しいものがあった。

他に、カワラケ焼成窯と思われる長軸1.1mの土坑がみつまっている。もしそうだとすれば、いまのところ県内では唯一の検出例である。

出土遺物 計342点の中世陶磁器とカワラケが出土している。内訳は、中国製品6点(青磁4、白磁2)、瀬戸窯44点、常滑窯21点、渥美窯9点、瓦質土器(内耳鍋・搦鉢)238点、カワラケ24点である。瓦質土器の割合が圧倒的で、同時期・同規模の埴谷周路遺跡と比べると常滑窯製品の割合が全く異なる点に特色がある。

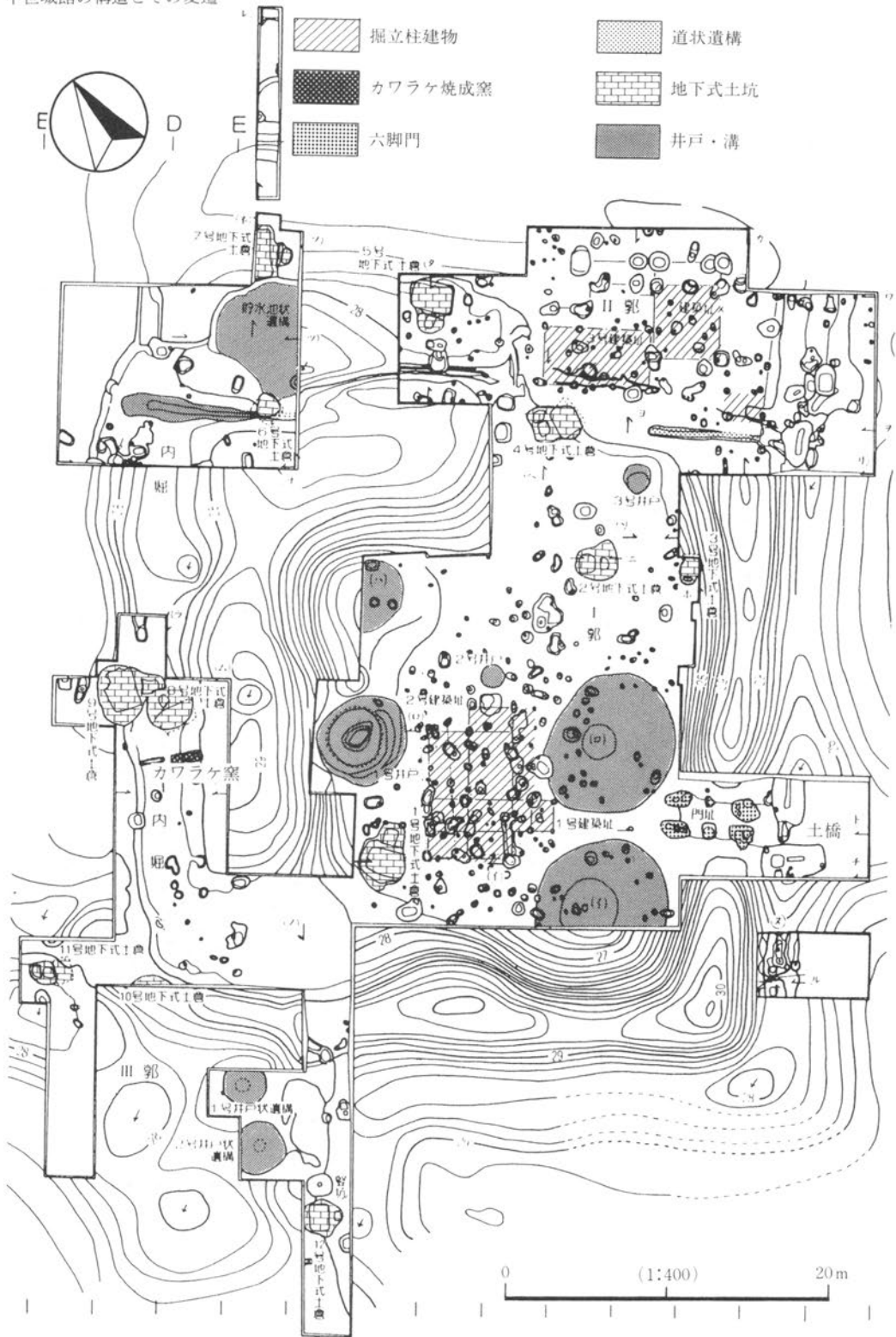
时期的には12世紀後半のものから認められるが、主体となる遺物は14世紀後半～15世紀後半までである。16世紀代までは継続しないようである。

小括 本遺跡の一番の特色は、郭面が堀の外の郭外より2m程低いことである。これは大規模な削平の結果である。また、郭内においても、主屋の方が北東張り出し部分の付属屋よりも1m以上低位である。そのためか、郭内の排水処理のための施設(井戸も含めて)が建物や通路



第6図 池ノ尻館跡現状測量図

中世城館の構造とその変遷



第7図 池ノ尻館跡全測図

のまわりに設けられている。

また、地下式土坑が計12基検出されているが、分布状況を見ると郭内では縁辺に掘り込まれているものが原形を留めていることから、大規模な削平が施された後の遺構であるといえる。郭外では井戸状遺構に対して新旧それぞれのものが認められ、堀内検出のものは堀より新しく掘り込まれた状況が窺える。

郭内だけに目をむけてみると、大規模な削平によって造り出された区画に、建物、井戸、排水施設、地下式土坑が一体のものとして配置されている。

3. 中世後期の城館跡

本節では、16世紀後葉から17世紀初頭まで存続した城館跡を対象とする。

(1) 和良比堀込城跡⁶⁾ (第8図)

所在地・立地 四街道市和良比に所在し、池ノ尻館跡の南西2.3kmに位置する。城跡は、印旛沼に注ぐ鹿島川に開析する支谷最奥部（支谷の途中に池ノ尻館跡がある）の標高28m程の舌状台地先端部に立地する。

調査の経緯と範囲 住宅・都市整備公団による土地区画整理事業に伴い、(財)印旛郡市文化財センターによって発掘調査が実施された。調査は東西110m、南北130mの規模を有する城跡に対し、堀や小規模な郭を除いてほぼ全面に近い範囲であった。調査面積は約13,000㎡である。

城館の時期 15世紀後葉～16世紀後葉。おそらく後北条氏が滅亡した天正18年(1590)に廃城になったものと思われる。

城館の性格 下総中央部を領有し、臼井城(佐倉市)を本拠とした原氏に従属した在地領主層の居城であったと考えられる。

検出遺構 城跡は7か所の郭(I～VII)から構成されているが、無論I・II郭が主郭部にあたる。実際発掘でもI・II郭からしか居住域は検出されなかった。(VII郭も居住域と思われるが発掘はされていない)

I・II郭面は、遺構検出面がハードローム層であるのに対し、周囲の土塁基底部には旧表土層である黒色土が残されていたことから、内部は0.5～0.8m程削平して造成されていた。

I郭では、掘立柱建物7棟、竪穴状遺構2基、地下式土坑7基、小型土坑5基、等が検出された。建物は中央やや東寄りに集中し、大きく2時期に分けられるが、新期は4棟から構成されるようである。建物群の西隣りで検出された竪穴状遺構は、長軸13.5m、短軸9.6m、深さ1.6mを測る大型遺構である。壁は45°程の立ち上がりで緩やかであり、底面は平坦である。重複する地下式土坑よりは新しい。南西隅の虎口近くで検出された竪穴状遺構は、長軸13m、短軸2.6



第8図 和良比堀込城跡全測図

m、深さ0.3mを測り、底面は硬化面が認められる。虎口につながる通路であろう。地下式土坑7基のうち、2基は竪穴状遺構より古く、北端の2基は竪坑部が土塁の下であることから、土塁構築以前の遺構と考えられる。ただし、何れの地下式土坑も削平は受けていない。

II郭では、掘立柱建物8棟、竪穴状遺構2基、地下式土坑6基、小型土坑37基、等が検出されている。建物は中央から北半部にかけて集中して分布しているが、重複は一か所だけで建物の軸方向からみて新期には最大7棟が併存していた可能性がある。II郭で主屋と考えられる建物(008)はI郭の建物を含めて最大規模である(32.5㎡)。竪穴状遺構は8.5m×7.2m、深さ0.7mと5.3m×4.1m、深さ0.3mの規模のものが2基検出されている。用途的には不明である。地下式土坑は北西隅に4基まとまって検出されている。建物と重複するものが1基あるが、地下式土坑の方が古い。小型土坑は北辺および西辺の土塁裾部に集中的に検出されている。II郭面は若干ではあるが東側の方が低位になっているが、おそらく排水を考えてのことであろう。

その他、III・VI郭では土坑が、V郭では土坑と柱穴群が検出されている。V郭の柱穴群は1～2棟の建物と柵列が復原できそうである。また、本城跡を特色付ける遺構として、堀底のコーナー部を中心に堀底土坑と称する掘り込みの深い土坑が多く検出されている。用途としては堀底に進入した敵に対するもの、堀に水がたまらないための水抜施設、井戸等が考えられる。一つだけの機能だけでなく多機能な施設であったと思われる。特に、井戸はI・II郭からは検出されていないので、機能の一つとして充分考えられる。

出土遺物 陶磁器・土器は、中国製品18点(染付6、青磁5、白磁7)、瀬戸美濃窯59点(小皿9、天目碗6、播鉢37、香炉3、茶入・壺・水指・鉢各1)、常滑窯7点(甕6、鉢1)、土器122点(在地形播鉢45、内耳鍋22、カワラケ54、羽釜1)で、計206点出土している。調査面積13,000㎡にしては遺物量は僅少である。特色としては、少ないながらも香炉・茶入・水指等が出土し、郭内での居住性を窺わせる。また、在地あるいは関東地域で焼かれたと考えられる播鉢・内耳鍋の比率が高いことが指摘できる。

また、I・II郭北辺およびII郭西辺の堀底近くから五輪塔・宝篋印塔・板碑が多量に出土している。宝篋印塔・板碑の一部には、暦応4年(1341)、康永3年(1344)、永和5年(1379)、応永18年(1411)の紀年銘が認められる。

陶磁器からみた時期は15世紀後葉～16世紀後葉であり、石塔の年代とは断絶が大きい。

小括 当城跡は、馬出(V郭)とそこからII郭に入る外柵形虎口の存在から小規模ながらも技巧的な縄張である。出土遺物からみても、16世紀後葉まで機能していたことは間違いなさであろう。また、建物配置や遺物組成からみて、郭内で日常生活が営まれていた可能性は高い。ただ、郭内から井戸が検出されていない点は問題であるが、堀底土坑を井戸として使用していたとすれば問題はないであろう。

郭内では、I・II郭各々1群の建物群が検出され、最低2時期の重複が認められた。城郭遺構からみれば、I郭が主郭でII郭が副郭であることは明白であるが、建物だけを取り上げれば、II郭の主屋が最も規模的に大きく、建物配置も整然としていることから、II郭の方がI郭より主となる生活空間であったと読み取れる。

郭内の排水処理は、I郭では大形の堅穴状遺構か、I・II郭を画する堀へ排水し、II郭では郭内の緩傾斜を利用して堀へ排水していたものと思われる。

地下式土坑は、他の遺構と重複する場合はすべて先行する遺構であり、果して土塁・堀が築かれた後も機能していたかどうかは疑問である。築城以前の遺構である可能性もある。ただし、削平は受けていないことから、郭内で認められた削平は築城以前に実施されていたことが考えられる。

堀底近くから出土した多量の石塔類は、出土レベルからみて16世紀後葉の廃城時に投げ捨てられたものである。これは「破城」行為に伴う儀式の一つである⁽⁷⁾と考えられるが、石塔の紀年銘とは時代的に大きく異なるものの、これらの石塔類は廃城されるまで郭内に造立されていたものと思われる。おそらく郭内で検出されている小型土坑が墓坑であろう。そうとすれば、郭内には城郭が機能していた段階に墓域が設定されていたこととなる。

(2) 長勝寺脇館跡⁽⁸⁾ (第9図)

所在地・立地 印旛郡酒々井町上本佐倉^{かみもとさくら}に所在し、印旛沼に注ぐ鹿島川の支流高崎川に開析する支谷最奥部に位置する舌状台地先端部に立地する。標高33mを測る。

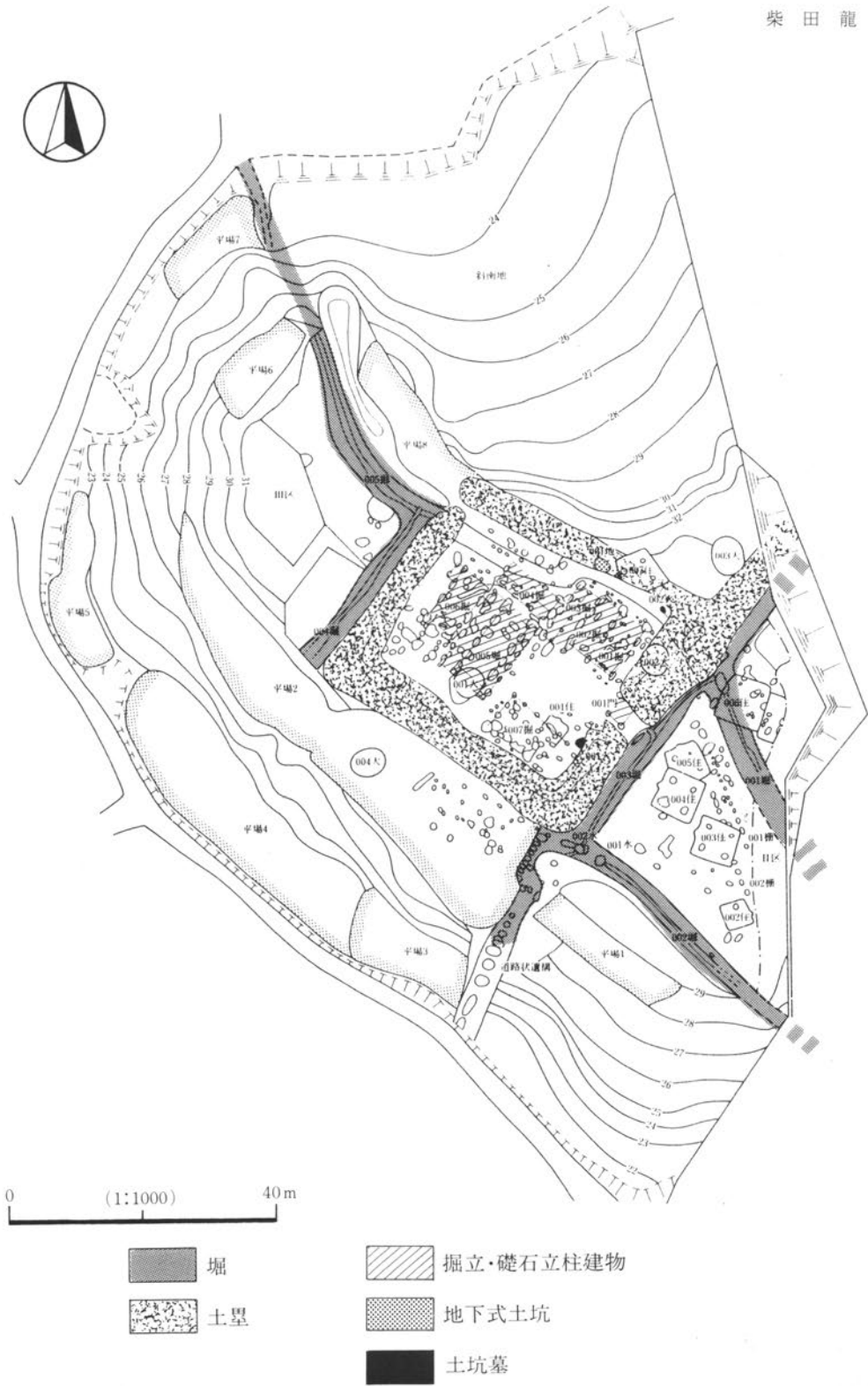
調査の経緯と範囲 民間不動産業者による宅地開発に伴い、(財)印旛都市文化財センターによって発掘調査が実施された。本館跡は本来4か所の郭から構成されたようであるが、既に東半部については発掘調査が実施されているので⁽⁹⁾、今回は西半部8,100m²を対象とし、本館跡の主郭を中心に実施された。

城館の時期 主体となる時期は16世紀中葉～16世紀後葉である。おそらく天正18年(1590)の千葉氏滅亡で廃城になったものと考えられる。ただし、替って当地域に入った徳川氏の勢力によって短期間使用された可能性もある。

城館の性格 本館跡に関する史料、記録、伝承は一切残されていない。しかし、本館跡の存続時期、位置、および周辺の発掘成果からみて、千葉氏の居城本佐倉城を囲む惣構ラインに置かれた出城であったと考えられる⁽¹⁰⁾。

検出遺構 発掘調査は、3か所の郭と8か所の腰曲輪を対象としたが、主郭を除いて郭を画する堀の他は、若干の柱穴、土坑、通路状遺構が検出されたに過ぎない。

主郭は、四辺に土塁を巡らし、北西辺と南東辺に堀を入れている。土塁内法で、長軸27m、短軸25mを測り、正方形に近いプランである。



第9図 長勝寺脇館跡全測図

遺構検出面はハードローム層であったが、周縁は盛り土造成が施されていたことから、元は緩傾斜地形であったのを、頂部を削平し周囲に盛り土をして平坦面を造り出していると考えられる。ただ、南西部は中央部より若干低くなっている。

郭内で検出された中世遺構は、礎石立四脚門1棟、掘立柱建物6棟、小型地下式土坑1基、火葬土坑2基である。

礎石立四脚門は、東南辺の土塁中央部が切れているところで検出された。掘立柱建物は四脚間を入れて広場の空間となるが、それを囲むようにL字型に配されている（門を入れて左手の建物は柱穴の形態から古代の時期とされている）。門を入れて右手の一群で一度建て替えが認められる可能性があるが、三面に廂をもつ主屋を中心とした群には建て替えは認められない。また、主屋の四隅の柱穴からは地鎮儀礼と考えられる合わせ口のカワラケが出土している。

小型の地下式土坑は、北東辺土塁の下から検出された。ただ報告書の記載および図をみるかぎり土坑と考えられることから、本論では検出例としては含めないこととする。

2基検出された火葬土坑は、骨片が少量検出されている。何れも土塁を切って掘り込まれていた。

出土遺物 中世陶磁器・土器は、中国製品10点（染付皿7、染付碗2、白磁皿1）、瀬戸美濃窯16点（天目碗3、灰釉平碗2、灰釉小皿9、播鉢2）、在地系播鉢2点、カワラケ162点が出土している。他には志野鉄絵丸皿1点、唐津焼の皿1点、茶臼3点、中国銭が9枚（永楽・宣徳を含む）出土している程度で、発掘面積8,100㎡にしては僅少な遺物量といえる。

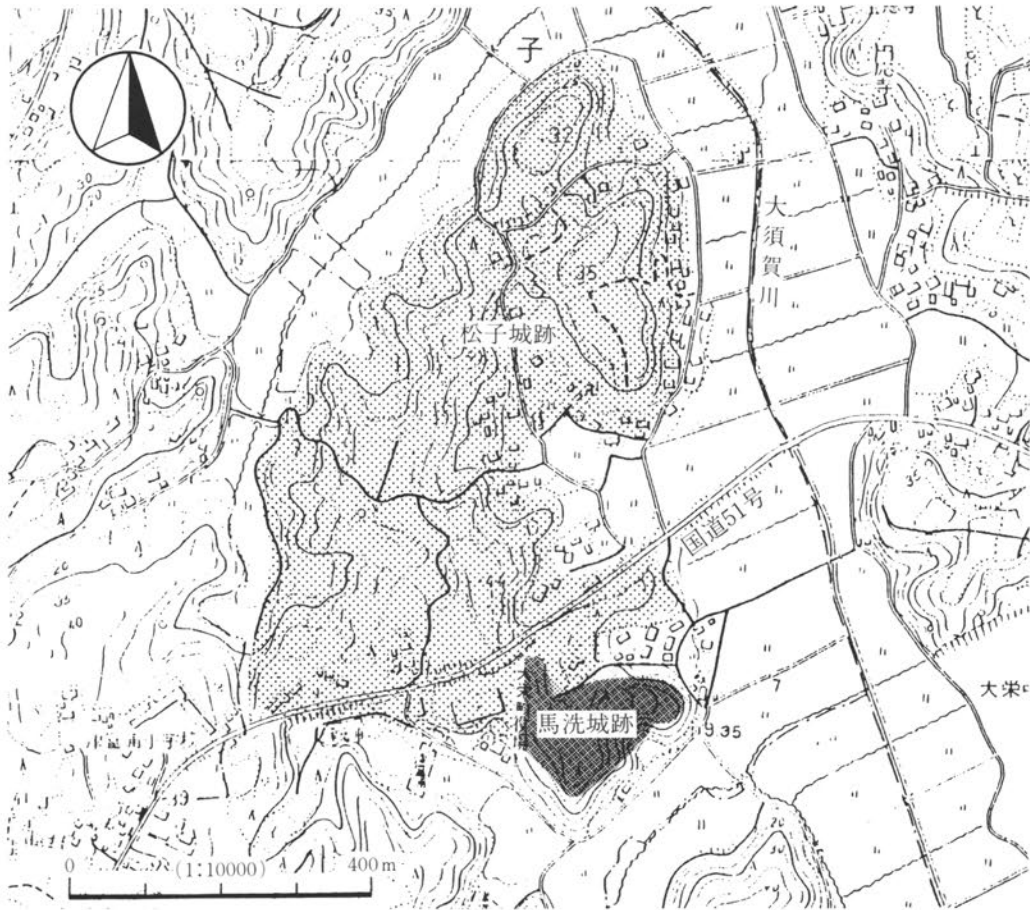
時期的には、16世紀前葉から16世紀後葉の陶磁器が主体を占め、若干ではあるが17世紀前葉の遺物も認められる。ただ、主屋建物群に関しては建て替えが認められないことから、本館跡の存続時期は長くともせいぜい半世紀程度であろう。

小括 郭内の状況をみると、中央北半部から北東部にかけてL字状に建物を整然と配置し、その前面には広場を配する形態で、小規模ながらも居住性が窺える。また、出土遺物も居住性を肯定するものであった。ただ、問題としては井戸が検出されていないことである。しかし、和良比堀込城跡と同様な堀底土坑が検出されているので、あるいは井戸としても使用されていた可能性もあるので、その点は解決できるであろう。

居住性があることと、本佐倉城惣構ラインに位置していることから、本館は惣構南西端における防御拠点であるとともに、ここの防御を担当した千葉氏の重臣層の居館としても使用されたものと考えられる。

（3）^{馬洗}馬洗城跡⁽¹¹⁾（第10・11図）

所在地・立地 香取郡大栄町松子に所在し、北流して利根川に合流する大須賀川の上流部に面する舌状台地全域に立地する。標高は35～42mを測る。



第10図 馬洗城跡・松子城跡位置図






調査の経緯と範囲 町の公共施設建設に伴い、町教委が臨時に調査団を結成して発掘調査が実施された。調査は城跡のほぼ全域に近い範囲で実施されたが、腰曲輪部分に関してはほとんど調査対象外であった。発掘面積は約10,000㎡である。

城館の時期 16世紀前葉～17世紀初頭。天正18年（1590）の千葉氏滅亡とともに一旦は廃城になったと思われるが、替りに当地域を領有した徳川氏によって一時的に使用されたようである。

城館の性格 東西220m、南北120m、5か所の郭（Ⅰ～Ⅴ）から構成される。郭数に比べて小規模な城郭である。ところで、現在は国道51号線によって北側の台地とは分断されているが、本来は台地続きであり、北側台地全面に展開する松子城跡とは一体のものであった。

松子城跡は、戦国期に大須賀川中～上流域を領有した大須賀氏の本城であった。馬洗城跡も含めた規模は南北1,000m、東西500mを測り（第10図）、下総地域でも有数の規模を持つ城跡である。馬洗城跡は、松子城跡との位置関係からみると、松子城の南端部における防御拠点であ



-  堀
-  土塁
-  溝
-  地下式土坑
-  土坑墓

第11図 馬洗城跡全測図

ったとみてよいであろう。

検出遺構 I・IV・V郭の全域、II・III郭は1/2程発掘されたが、掘立柱建物はI・IV郭で集中して検出された（V郭は第11図では多数の遺構が図示されているが、大部分は縄文期の遺構で中世遺構はほとんど検出されていない）。

I郭では、郭内中央部分で重複の激しい建物群がみられ、30m×25mの範囲で小溝によってコの字状に区画されている。V郭およびII郭側は広場的性格であったようである。また、火葬墓坑3基、地下式土坑2基が検出されているが、建物群との新旧関係は不明である。

IV郭でも復原可能な建物が何棟か検出されているが、郭内全域に分散して配置されI郭のような求心性と重複関係は認められない。

井戸は、全面発掘されたI・IV・V郭においても全く検出されていない。

出土遺物 報文に記載がないため出土点数は不明であるが、中国製染付、瀬戸美濃窯（志野釉皿、灰釉丸皿、鉄釉丸皿、天目碗、錆釉播鉢）、常滑窯（甕・片口鉢）、在地系播鉢、カワラケ等の陶磁器・土器が出土している。瀬戸美濃窯の灰釉丸皿が多く出土しているようである。

若干15世紀代に入る製品も認められるが、瀬戸美濃窯製品は大窯1以降大窯4段階のものまで出土していることから⁽¹²⁾、時期的には16世紀初頭から16世紀末葉～17世紀初頭となる。

小括 小規模ながらも5か所の郭から構成され、郭の主従も明確なことから、独立した一つの城郭と捉えられる。郭内の構造をみると、居住空間はI・IV郭に限定されるが、I郭はIV郭に比べ居住域として強く意識されていたことが明らかである。出土遺物の組成もまたそれを窺わせる。ただし、堀は全面的に発掘されていないため、和良比堀込城跡や長勝寺脇館跡で検出された堀底土坑があった可能性もあるが、郭内から井戸が検出されていない点は問題となる。

また、本城跡でもI郭内から土坑墓と地下式土坑が検出されており、建物群との新旧は不明であるものの、I郭内が小規模な墓域として使われていた時期があった。

馬洗城跡は、先述したように占地場所と松子城と同じ存続時期であることから、松子城の南端部の防御拠点であり、かつ松子城主大須賀氏の重臣層の居館も兼ね備えていたといえる。基本的には、長勝寺脇館跡と同様な機能を果していたと考えられる。

4. 中世前期～中期の城館の特色

検討事例がわずか下ノ坊遺跡と岩川遺跡の2例だけであり、これだけで該期の城館の特色を普遍化できるとは思われないが、取敢えず2事例で認められた特色についてまとめてみる。

共通項

①河岸段丘縁辺に立地する。

②一辺を段丘崖とし、堀をコの字状に掘り、方形区画を形成する。

上記のように堀を巡らせることは、堀は水堀として機能するのではなく、防御や居住域の区画の他に、崖線下に排水することで館内の地下水位を下げる働きがある。

③発掘によって偶然に発見された。

④13世紀代には成立し、14世紀後葉から15世紀前葉には廃絶する。

⑤防御的に機能する堀は、遅くとも14世紀後半には認められる。

⑥木組み構造の井戸の検出。

いまのところ、県内における中世の検出例は2事例のみである。

非共通項

①館内の居住域は、下ノ坊遺跡では中央部分に設定され(求心性)、周辺部分は広場的な空間であったが、岩川遺跡第1区画では逆に周辺部分に設定され(分散性)、中央部分が広場的な空間であった。

②主屋は、下ノ坊遺跡では掘立柱建物、岩川遺跡では礎石立建物であった。

③墓坑は、下ノ坊遺跡では検出されていないが、岩川遺跡では検出された。ただ、墓域として捉えられるものではない。

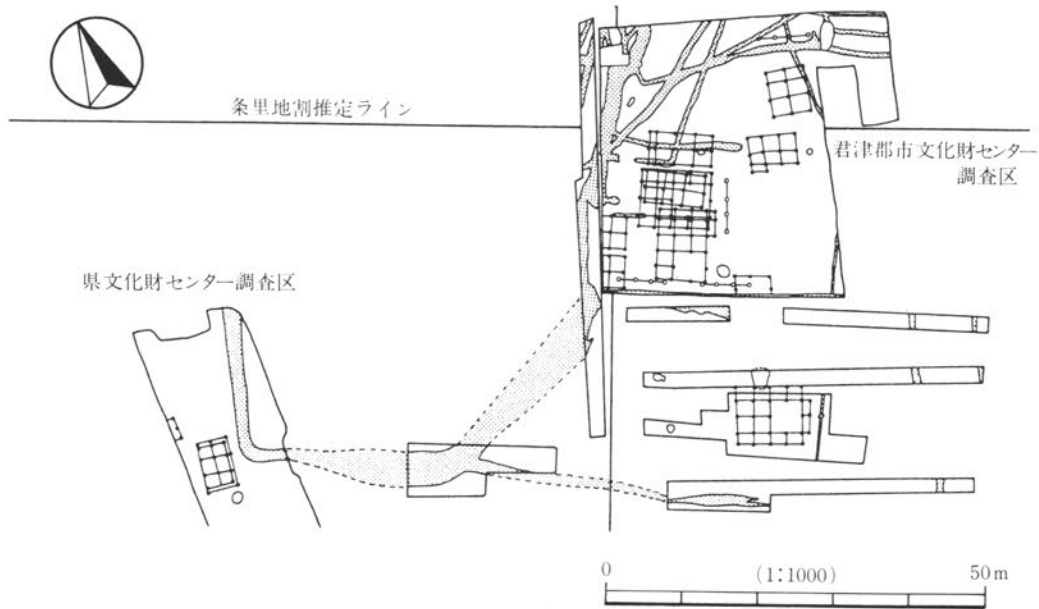
また、下ノ坊遺跡では館外を発掘していないため、対比することは不可能であるが、岩川遺跡では複数の区画から構成される屋敷の集合体構造であった。このようなタイプの中世遺跡は、新田遺跡(宮城県多賀城市)や田村遺跡群(高知県南国市)を始め、規模・性格が異なるものの全国各地で検出されている。

ところで、県内では中世前半期の屋敷跡が検出された事例として外箕輪遺跡がある。本遺跡は君津市外箕輪に所在し、東京湾に注ぐ小糸川下流域右岸の標高16mの低位段丘面に立地する。発掘調査は、(財)千葉県文化財センター⁽¹³⁾と、(財)君津郡市文化財センター⁽¹⁴⁾によって2回実施された。

遺跡の時期は、中世に関しては12世紀後半に成立し、14世紀前半には廃絶する。検出された中世遺構は、総柱の掘立柱建物12棟、溝17条、井戸1基等である(第12図)。出土遺物は、君津郡市文化財センターでは、中国製品28点、常滑窯36点、渥美窯19点、瀬戸窯4点、カワラケ307点である。中国製品には青白磁の梅瓶や二彩陶器盤の優品も含まれる。

西側の調査区(県センター分)で検出された直角に曲がる溝は、上幅2m、深さ0.6~0.85mを測るが、東側の調査区(君津センター分)では上幅1.2m、深さ0.8mの規模で続くが、方形プランの区画にはならないようである。また、建物群は小溝で区画されている可能性は考えられるが、少なくとも防御性のある堀で区画されてはいない。

外箕輪遺跡は、下ノ坊遺跡や岩川遺跡に比べると半世紀ほど早く成立し、半世紀から1世紀



第12図 外箕輪遺跡全測図(註14文献より)

近く早く廃絶するが、13世紀代は3遺跡とも共存し、立地も含めて時期的に共通する。また、岩川遺跡のように明確に各々が方形に溝で区画された状況は捉えられないものの、屋敷の集合体であった可能性がある。しかし、防御性のある堀で区画はされていなかった。

以上、中世前期から中期にかけての館あるいは屋敷である3遺跡の最終時の形態（外箕輪遺跡・14世紀前半、下ノ坊遺跡・14世紀後半、岩川遺跡・15世紀前葉）から言えることは、沖積地に立地する館あるいは屋敷の城郭化は14世紀後半以降である。しかし、15世紀に入ると早くも廃絶してしまう。この点は、次節で述べる台地上に立地する城郭の成立と表裏一体のものと考えられる。また、堀や溝は防御や区画の他に、館内の乾地化を目的とした排水施設の機能も重要であった。館内で墓坑が検出された事例は岩川遺跡だけであるが、館内に設定された屋敷墓として捉えられる段階ではない。

建物配置については、居住域が求心性をもつ場合（下ノ坊遺跡）と分散性の場合（岩川遺跡と外箕輪遺跡）の二通りがある。おそらく、遺跡の性格差に起因しているものと思われるが、まだ各々の遺跡の性格付けができるだけの資料の蓄積がないため課題として残される。また、村落遺跡との関係も同様である。

5. 中世中期～後期の城館の特色

埴谷周路遺跡と池ノ尻館跡の2事例について検討した。

共通項

- ①何れも14世紀後半に成立し、15世紀後半に廃絶する。
- ②谷津最奥部の台地上に立地する。
- ③地表面観察で、土塁および堀跡が確認できた。ただし、城館跡に関する史料・記録・伝承は全く残されていない。
- ④基本的には土塁・堀で区画された範囲は単郭構造であった。しかし、発掘調査によって溝(埴谷周路遺跡)や段差(池ノ尻館跡)により二つの区画から構成されていることが明らかとなった。
- ⑤館内部は大規模な削平のため館外部より低位となる。
- ⑥館内部の隅は居住域より低く掘り窪めてある。館内の排水処理のためと考えられる。
- ⑦主屋は虎口の近くに置かれる。
- ⑧井戸あるいはそれに準ずる施設が検出されている。
- ⑨地下式土坑が検出されている。

非共通項

- ①土塁内法で、埴谷周路遺跡は35～40m×50～60mの規模、池ノ尻館跡は20m×30mと、面積比は3：1程となる。
- ②埴谷周路遺跡はほぼ方形プランを呈するが、池ノ尻館跡は2か所に張り出部を有する方形を基本とする多角形プランである。
- ③土坑は埴谷周路遺跡では27基検出されたが、池ノ尻館跡では検出されていない。土坑は、板碑片の出土と形態・規模からみて墓坑であった可能性が高い。

以上、2遺跡にみられる特色をまとめてみたが、規模が全く異なるにもかかわらず前代の城館に比べると共通性が高いことがいえるであろう。また、前代の城館との連続性でみた場合、そもそも立地形態が低地と台地で全く異なることから構築方法には大きな違いがあり、館内の排水処理方法もおのずと違ってくる。しかし、方形を意識したプランであることと、建物配置に求心性(池ノ尻館跡)と分散性(埴谷周路遺跡)の二通りのタイプが認められる点は、連続性が認められる。

ただ、最も非連続性のものとして、地下式土坑の存在がある。この遺構の性格をどう見るかによって遺跡の性格が大きく違ってくるが、現在考えられている性格は、①収納・貯蔵施設⁽⁵⁾、②葬送関係の施設⁽¹⁴⁾、③場所によって両者の機能を使い分ける、と考えられており、性格とし

ては二通りの説がある。

本論では、①地下式土坑の時期が判明する限り15世紀代に限定される、②主に南関東地域で検出される、③天井部が残されているものは堅坑部が人為的に埋め戻されている、こと等から、収納・貯蔵施設とすれば時期的にも分布的にもっと普遍性が認められなければならないが、特殊なあり方をすることから葬送に関係する施設であると考えている。

そうであるならば、埴谷周路遺跡や池ノ尻館跡は、館内に墓域が設定されていたこととなる。そして、池ノ尻館跡の郭内では地下式土坑と館を構成する他の遺構との重複関係はないが、埴谷周路遺跡では検出された4基の地下式土坑すべてが人為的に蓋をするように埋め戻され、すぐに別の遺構が構築されている。これは、最終的な形態である土塁と堀で区画された館に先行する遺構であることを意味している。が、しかし両遺跡とも館内部は大規模な削平を受けているにもかかわらず、地下式土坑自体は上部が削平されている状況にはない。とすれば、まず削平によって区画が造り出され、次に区画内および区画縁辺に地下式土坑が掘られ、さらに地下式土坑の存在を認識しつつ土塁や区画溝を築く（＝城郭を築く）過程が、埴谷周路遺跡では認められる。池ノ尻館跡でも同様な過程があったといえなくもない。

削平によって区画された中から地下式土坑が検出される事例は、台地整形区画と呼ばれ県内でも多数検出されているが⁽¹⁵⁻¹⁶⁾、性格としては墓域であるとされている。そうとすれば、埴谷周路遺跡は、当初は墓域として設定され機能したが、時間的な断絶もなく、墓域の区画を意識して城郭化した館を築いたことになる。まさに、「聖」の空間から「俗」の空間に置き換えられたのである⁽¹⁷⁾。池ノ尻館跡では、大きく「聖」から「俗」へ転換したが、「聖」と「俗」が共存していた可能性もある。後者の場合だと、館内に屋敷墓が設定されていたことになる。

以上、14世紀から15世紀にかけて機能した館は、台地整形区画といわれる墓域と密接なつながりを有することが明らかとなったが、「聖」＝（墓地）から「俗」＝（館）へと全く性格の異なる空間へと転換した時期が15世紀代とすれば、城郭化した館構造は14世紀代にはまだ成立せず、15世紀代に入って現われる構造であったともいえるであろう。前節でみた低地における城郭化が14世紀後半代であったのに比べると、半世紀以上の遅れがある。このことは、台地上での居住空間の設定そのものが15世紀に入ってから行われたことを意味している。要因としては、関東では15世紀に入ると鎌倉府権力が急速に衰退・滅亡するが、この段階で在地の社会構造も大きく変わり、旧来からの村落構造の解体にも拍車がかかり、新たに再編された村落と一体となった城郭（＝村落型城郭）⁽¹⁸⁾が生まれたためと考えられる。

6. 中世後期の城館の特色

和良比堀込城跡、長勝寺脇館跡、馬洗城跡の3事例について検討した。

共通項

- ①成立時期は15世紀後葉から16世紀中葉と共通性はないが、廃城時期は何れも16世紀後葉から17世紀初頭に限定される。
- ②舌状台地の先端部に立地する。前代の城館跡とは大きく異なる。
- ③土塁・堀で区画された郭が複数で構成される。前代の城館跡は単郭構造であった。
- ④郭内から井戸が検出されていない。ただし、和良比堀込城跡と長勝寺脇館跡では堀底土坑が井戸の機能を果していた可能性がある。
- ⑤建物配置は各城館跡とも主郭においては求心性が認められた。
- ⑥土葬墓、火葬墓等の墓坑が検出されている。

次に3遺跡中2遺跡で共通して認められた成果について記す。

- ①郭内の排水処理のためか、郭内縁辺が低くなっている（和良比堀込城跡・長勝寺脇館跡）。
- ②地下式土坑の検出（和良比堀込城跡・馬洗城跡）。
- ③郭内の削平造成（和良比堀込城跡・長勝寺脇館跡）。
- ④堀底土坑の検出（和良比堀込城跡・長勝寺脇館跡）。
- ⑤建物の建て替えは1回であった可能性が高い（和良比堀込城跡・長勝寺脇館跡）。なお、馬洗城跡に関しては不明。

非共通項

- ①馬洗城跡Ⅰ郭で検出された建物群は、小溝によってコの字状ないしは方形に区画されている。和良比堀込城跡と長勝寺脇館跡では小溝による区画は認められない。
- ②各城館の各郭ごとの建物配置は求心性が認められたが、郭間でみると各々の城郭は異なった構造を取る。即ち、和良比堀込城跡ではⅠ郭とⅡ郭で建物配置だけからはどちらかの優位性は捉えられない。長勝寺脇館跡では基本的には主郭のみに居住のための建物が検出された。馬洗城跡ではⅠ郭のⅣ郭に対する明瞭な優位性が捉えられた。

以上、16世紀後葉から17世紀初頭まで機能した城館跡の特色についてみてきたが、15世紀後葉には廃絶した城館跡とは共通性が多くあることが明らかとなった。台地先端部と台地基部との立地の違い、複郭と単郭の違いはあるものの、郭内に目をむければ、建物の配置形態、郭面の一部が低位、郭内の削平造成、地下式土坑の検出等、郭の造り方から始まって郭内の使い方まで基本的には主郭に限っては前代の城館と何ら変わりはないのである。

特に和良比堀込城跡では、検出された地下式土坑は削平後に構築されたが、他の遺構と重複

する場合はすべて地下式土坑の方が古く、築城以前の遺構である可能性が高い。そうであるならば、埴谷周路遺跡や池ノ尻館跡でみたごとく、当初は台地整形区画の墓域が設定されたが、後に墓域を意識して城郭が築かれたことになる。さらに、堀底から多量の石塔が出土していることは、廃城時まで城内に石塔が造立した墓坑群からなる墓域が設定されていたことを意味する。ただし、14世紀中葉から15世紀初頭までの紀年銘を有する石塔が出土したからといって、この時期まで築城年代を遡らせることには無理がある。墓坑と考えられる土坑群は台地整形区画を造るための削平後に掘り込まれたものであるため、14世紀代から廃城時まで同一場所に造立されていたとは思われない。14世紀～15世紀代に行われた村落の再編成に伴い、居住域の移動や屋敷墓の確立を通して、墓地は移転してきたものと考えられる。

ところで、15世紀に入って築かれる城館の郭内（特に主郭）は居住空間であったとして記述してきたが、一つ留意せねばならない点は、郭内の井戸の有無である。前代の城館跡は井戸あるいはそれに準ずる施設が検出されているが、後期の城館跡では検出されていない。これは、郭内が実際に日常生活を営む居住域であったのか、疑問を感じさせる点である。さらに、遺物出土量を発掘面積比で見ると、前代に比べかなり減少する点は日常性が低下したことを意味するかもしれない。また、和良比堀込城跡でのⅠ・Ⅱ郭間における建物配置の優位性の不明確さもその表われである可能性もある。

では、後期の城館における日常生活の居住域はどこにおかれていたかという点、和良比堀込城跡ではⅦ郭とした一段低位の郭であったと考えられる。よく「ネゴヤ」地名が残されているような場所である。ただ、現段階ではそれを証明する考古学の成果はないため、あくまでも推定の域ではあるが。

逆に長勝寺脇館跡や馬洗城跡では井戸は検出されていないものの、主郭が居住域であることは他の郭に比べ極めて明確である。これは、村落と一体となった在地領主層の居城（＝村落型城郭）であった和良比堀込城跡と違って、広大な領主権力の居城と城下集落を囲む惣構構造の城郭（都市型城郭）⁽¹⁸⁾の一端に位置付けられた城郭の特色の一つであるといえるであろう。

7. 立地、形態、内部構造の変遷

中世全般にわたって城館の立地、形態、内部構造について、その変遷をみてきた。その結果、屋敷・館が城郭化するのは14世紀後半以降で、この段階ではいまのところ城郭の立地は低地に限られる。逆に台地上に土塁と堀で区画された城郭が築かれるのは、15世紀以降（おそらく中葉以降）にならないと出現しないようである⁽¹⁹⁾。また、台地上に立地する城館は、15世紀段階では台地先端部の他に谷津奥部の台地基部に立地するタイプも多くあった。16世紀段階は台地先端部に限られるようである。

形態的には、立地が低地と台地に異なるものの、15世紀段階に入っても方形を強く意識した平面プランを呈している。16世紀段階では長勝寺脇館跡のような方形プランもみられるが、地形を意識したプランが主体になるものと思われる。また、15世紀段階では郭内は細分されているものの土塁と堀で区画された郭は単郭構造であったが、16世紀段階は複郭構造となる。

城館内部の構造では、建物配置については13世紀～14世紀段階の下ノ坊遺跡で館中央部での求心性、岩川遺跡で館縁辺部への分散性がみられ、15世紀段階では館中央部からややズレた場所に求心性があり、しかも2極分化の傾向がある。16世紀段階も基本的には前代の傾向を踏襲するが、複郭構造になったことから馬洗城跡IV郭のような分散性の認められる建物配置が再びみられるようになり、郭間の主従関係が明確となる。逆に、和良比堀込城跡のI・II郭のように主従関係が不明確な場合もある。このことは、都市型城郭と村落型城郭の違いに起因している可能性がある。

前節でみたように、15世紀以降の台地上に立地する城館は「聖」域上に築かれる例が多い。「聖」域である墓域を「俗」域である城館に造り替えるわけであるが、和良比堀込城跡で確実に捉えられた郭内の屋敷墓(=城の墓)は、「俗」域の一画に「聖」域を取り込んでいることを示している。このような構造は、岩川遺跡で萌芽的なものが認められる可能性があるが、少なくとも15世紀段階の城館では普遍化していたものと思われる。15世紀は村落構造の再編成を契機として、村落と一体化した城郭=村落型城郭が成立した時期であるが、このことが「聖」域から「俗」域へ転化させた要因であろう。

16世紀後葉まで機能した城館では、建物配置など空間構造は前代と比べ大きな変化はないものの、郭内における居住性の低下が窺える。さらに、この段階は惣構構造を有する都市型城郭が登場してくるが、長勝寺脇館跡や馬洗城跡は都市型城郭を構成する重要な要素の一つであるものの、郭内の実体は基本的には村落型城郭であった。

おわりに

中世城館が約400年間の時間幅の中でどのように変化してきたかを、千葉県内の考古学の成果を使って見通してきたが、変遷を追うあまり網羅的に成り過ぎた傾向がある。また、資料的不足している段階での変遷の見通しでもあるため、再度新たな資料を得て個別的に検討を深めていく必要もあるであろう。具体的には、村落遺跡との関係、低地から台地への立地の変化、「聖」域から「俗」域への転換の理由、さらに、城館は果して当時の人にとって「俗」地として認識されていたのか、等残された課題は多い。

ところで、当初目的としたことは、城館内部の建物の構造、規模、配置、等からみた空間構

造の分析が主眼であった。しかし、本論で明らかのように空間構造については極めて漠然とした内容となってしまった。これは、今回事例として取り上げた報告書の多くが分析する上での基本となるデータが記載されていなかったことによる。せっかく城館跡の発掘としては珍しく大規模な面的調査が実施されたにもかかわらず、それが報告書に反映されていないことは実に残念である。城館跡の発掘は、特殊な掘り方があるわけではなく、また特別な成果のまとめ方もない。他の時代の遺跡と基本的には何ら変わらないのである。

最後に、今後は他地域の資料との比較検討を通して地域性の有無を捉えていきたいと考えている。

註

- (1) (財)千葉県文化財センター 1990 『下ノ坊遺跡B地点』
高梨俊夫 1991 「下ノ坊遺跡B地点」『千葉史学』第18号 千葉歴史学会
- (2) 佐藤博信 1994 「房総の中世後期における寺院と権力」『日本史研究』378号 日本史研究会
- (3) (財)長生郡市文化財センター 1990 『岩川・今泉遺跡』
津田芳男 1991 「岩川遺跡(館跡)」『千葉史学』第18号 千葉歴史学会
- (4) 山武町教育委員会 1983 『埴谷周路遺跡』
- (5) 中野遺跡調査団 1986 『下総国四街道地域の遺跡調査報告書』 四街道市教育委員会
- (6) (財)印旛郡市文化財センター 1991 『和良比遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
- (7) 柴田龍司 1992 「堀跡や曲輪から出土する石塔」『中世城郭研究』6号 中世城郭研究会
- (8) (財)印旛郡市文化財センター 1990 『長勝寺脇館跡』
- (9) 報告書は未刊であるが、註8の文献に全測図が記載されている。
- (10) 柴田龍司 1991 「下総本佐倉城跡について－惣構の検討－」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』4集 帝京大学山梨文化財研究所
柴田龍司 1993 「本佐倉城惣構の再検討－長勝寺脇館跡の発掘成果を通して」『中世城郭研究』7号 中世城郭研究会
- (11) 大栄町教育委員会 1989 『馬洗城址発掘調査報告書』
- (12) 藤澤良祐 1993 『瀬戸市史 陶磁史篇四』P450 愛知県瀬戸市
- (13) (財)千葉県文化財センター 1989 『君津市外箕輪遺跡・八幡神社古墳発掘調査報告書』
- (14) (財)君津郡市文化財センター 1994 『外箕輪遺跡発掘調査報告書』
- (15) 半田堅三 1993 「地下式墳再考－市原市台遺跡中世遺構の分析－」『市原市文化財センター研究紀要』II
(財)市原市文化財センター
- (16) 伊藤智樹 1986 「土壇群を伴う堅穴状区画について－台地整形区画に関連して－」『研究連絡誌』第17号
(財)千葉県文化財センター
- (17) 中澤克昭 1993 「中世城郭史試論－その心性を探る－」『史学雑誌』第102編第11号 史学会
- (18) 柴田龍司 1994 「村落型城郭から都市型城郭へ」『千葉城郭研究』第3号 千葉城郭研究会
- (19) 福島県文化センターの飯村均氏の御教示によれば、福島県や宮城県で14世紀後葉から15世紀前葉に遡り、丘

陵上に立地し横堀や大規模な堀切を伴い、恒常的に使用された城跡が検出されているとのことである。千葉県内でも14世紀代の台地上に立地し恒常的に使用された城跡が今後発見されることは充分考えられる。また、無論15～16世紀段階でも低地に立地する城郭が存在していたことは言うまでもない。

☆追記

脱稿後、飯村均氏の「山城と聖地のスケッチ」を拝読した。飯村氏は、在地領主の山城は視覚的に聖地を尊重し、また同時に領民が城と聖地を重ね合わせて目視できる場に築くとした。さらに、戦国大名等の広域領主権力が関わった山城は、聖地を取り込み、聖地を俗地に置き換えているとしている。

拙稿では城館内部から見た「聖」と「俗」の関係について考えてきたが、飯村氏は城郭全体と「聖」との関係について捉えており、拙稿における「聖」から「俗」への転換の理由を考える上で大変示唆に富む指摘である。

飯村均 1994「山城と聖地のスケッチ」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』5集 帝京大学山梨文化財研究所

(財団法人千葉県文化財センター市原調査事務所)